自分らしく

中　二

「もう少し、女の子らしくできないの？」
この言葉は、私が小さいときに親や祖母によく言われた言葉です。私は兄に付いて回ることが多かったので、人形を買ってもらっても外でサッカーをして遊んだり、座るときもあぐらだったりと「男の子っぽく」育ちました。そのせいもあってか、いたずらをして怒られることは日常茶飯事で、そのたびに「女の子らしく」と言われてきました。私は、その言葉が大嫌いで、何度かその怒りをぶつけたことがありました。
「女の子だとサッカーやっちゃいけないの？」
「なんで私はだめでお兄ちゃんはいいの？」
今思えば、私のことを考えて言ってくれていたのだと思います。しかし、私は、「女の子らしく」という言葉が自分を縛る太く重い縄のように感じ、自由を奪われてしまったようでなりませんでした。
小学校に上がり、サッカーをやるようになりました。休み時間にサッカーで遊ぶと、
「お前、男みたいだな。」
と言われることがありました。
「だったら何だ。サッカーやって何が悪い。」
と口では言っていたものの、内心は男子と女子でこんなにも高い壁があるのか、と思いました。また、男子と女子で腕ずもうをして、男子が負けたときに、
「男のくせに弱いな。」
「女にも勝てないのかよ。」
という声があがりました。男と女の性別が違うだけで比べられ、そこからけんかになることもありました。女の子だってサッカーや野球をする子はいるし、男の子だって力の弱い子やおとなしい子はいます。人には長所があり、短所もあるのは普通ですが、男の子らしくないから、女の子らしくないからだめだ、というのは普通なのでしょうか。
私のクラスでは昨年、道徳の授業で「男らしい、女らしいとは何か」について考えました。「男らしい」では、「強い、足が速い、頼もしい」、「女らしい」では、「おとなしい、料理ができる、優しい」

という意見が出ました。そこで、「男らしく、女らしくしなくてはいけないか」考えたところ、「無理に変える必要はない、自分が一番」という意見が出ました。私は、そんな意見を聞いて、なんとなく嬉しくなりました。女らしくと言われても、男みたいだと言われても、変える必要はないと思えたからです。

昔は、男は、強くたくましく働きに出て、女は、静かでおしとやかに家業に専念していました。男らしく、女らしくないと結婚もできませんでした。しかし、今は男だって育児をします。女だって働き、社長になる人もいる、そんな時代です。個性を変える必要もなければ、他人の個性を否定する権利もありません。私は、今でもサッカーが大好きだし、座るときは、あぐらが楽でよくあぐらをかいています。私は、自分自身を変えるつもりはないし、たとえ、誰に何と言われようと変えません。たとえば、将来の夢はケーキ屋さん、という男の子と、将来の夢はプロレスラーになること、という女の子がいたらどんなことを思いますか。私は、男の子なのに、女の子なのに、というのが第一印象になると思います。でも、よく考えれば、ケーキ屋、つまりパティシェで有名なのは、男性のほうが圧倒的に多いし、アイドルと兼業している女性のレスリング選手だっているのです。もし、自分がそういう人たちに、

「男なのに、女なのに」と言って夢を壊してしまったら、と思うとゾッとします。ケーキ屋さんという夢、レスリング選手という夢。周りが何と言おうが、その人たちの素敵な個性であることに変わりはありません。

金子みすずさんの「私と小鳥と鈴と」の詩の中で、「みんなちがってみんないい」という言葉が出てきます。世界には約七十億人もの人がいて、七十億の個性があり、それは誰一人として同じではありません。みんなが同じだったら楽しい生活なんて送れないと思います。もし、実験に興味のある人がいなかったら、何の発明もなく、世界は進化できません。もし、全ての人の意見が同じだったら、話し合いはいらないし、対立することもないつまらない毎日になるでしょう。「みんなちがってみんないい」みんなが違うからこそ、今の世界

が成り立っているのです。私にも当然、長所や短所、得意や不得意があるけれど、全て自分として、これからの自分を作り、磨いていきたいです。